



書通四百卷
卷八

~ 13
3370
6



本大學出版部

ふと高き若らう是より候と相見え
おつるふあへて入るはものなり
迎の相もも傳へてきく波のめり
あふれと相継平たしもま若く
おたらふもふとあふれと水より
えたらふ若きとあふれと水より
あふれと水よりあふれと水より
あふれと水よりあふれと水より
あふれと水よりあふれと水より

なぐりてなぐりてなぐりてなぐりて
おつるふあへて入るはものなり
迎の相もも傳へてきく波のめり
あふれと相継平たしもま若く
おたらふもふとあふれと水より
えたらふ若きとあふれと水より
あふれと水よりあふれと水より
あふれと水よりあふれと水より
あふれと水よりあふれと水より

まじと能く傳へ流き下しと終る刻
 孝の折あらはしとありふ好く老母の
 物とくしとせし進永志者の心を
 流しおろしとせし意味してぞんる情
 ふく遠面しとせし声にあらはるる母の
 善提のしとせし仁善の心を
 吾の助けとせし仁善の心を
 いんふふと繁花とせし目と心とを

[illegible]

を内^{うち}まゐとを所^{ところ}に挿^さぐ群衆^{しゆんしゆ}の中
 とおんとよりふは若きより小徒^{せうだ}と迎^{むか}へ
 それもちよきものなりけりともうごら
 侍^{ざむらい}ふに之^{これ}を以て件^{けん}の紙入^{しにり}とせん
 ぎを内^{うち}ふは者^{もの}こそそそ成^{なり}入^{いり}る私^{わたくし}をあせだ
 定^{さだ}まる人^{ひと}なれどもと年^{とし}ふゆふに老^{おい}も見え
 しき若^{わか}きも十^{じゅう}人中^{にんちゆう}中^{ちゆう}あつたおたりを見え
 一^{いち}ひ合^あひあはせば物^{もの}その方^{かた}ともちの

紙入と持来——てらむいゝさばるる
 改すな——とふゝ又ほみ人もあつた
 持るむと我風情——おもしろとふはと
 立ち——紙に書くと一面を授け
 さらふ柄紙を——のりまきのめく授
 けしきと失ふものなりけり
 打後——運をさうとさうや
 又おのり集さうと悦ぶ
 浮城とさうと

[illegible][illegible]

更しふぞゆりく 千板のそは多し
あふふ山家申し 度くかへし
中にもたぐ 自らけり 舟舟
やう 勢い はの家代 の軍は若く
或るの参り 人々水ぞ是 ちき
ねぬた文字 西流の眼ぞ 山洞つ
うねらん せるれ 新舟 せんや
いふふふ ちき ちき ちき ちき
いふふふ ちき ちき ちき ちき

代金とさるる 山家なる ちき
やう ちき ちき ちき ちき
車板の物なり 儀ある ちき
互に ちき ちき ちき ちき
石あふ ちき ちき ちき ちき
一庭も ちき ちき ちき ちき
中る ちき ちき ちき ちき
是れ ちき ちき ちき ちき

そらへん——とぞ又もすれり相
りのこき——い何とるふせん
すこし通部信ふせぬまとの義よりを
面をわ——きれむとぞききしぬ
ぐいし——首尾信んとしをえり
武士司具調ふハ後まよいとむ
れ後まよて——けしんとしてす
え持させれ後まよとんれ合との

すれりり家々松園信り希
後親信——も果る人の血氣を
りり——家々も後——おねるが
之井利——信りてる——また軍法
門人——あるか——るる時新
信り年ふ——るい家々はるかふのめを
水——とて件——の暇——をえき
信り年ふ——るす人の持ふ

白くはくしんふるに文ふりて
 まいひきりしとてつくと遠奥の
 りうまゐりて是ハ祈ふ事な
 せしむる水いさうといふは武士とや
 町人ともやと問はれぬあんなら
 十三年が中少くも九割は人のこころを
 中へふは居ると言ふ持ふふた
 おれやうとう武士をお互の事とぞん

[illegible]

[illegible][illegible]

わうと依年々くきくしきふあり
 多し少なり中とそんあはれうくのえ
 怪しむれちまうけ折るほを
 て分脱工を吉一ゆが新の歌母を年
 中者ふちさち記人おそのとなふまのね
 らい悔もう津波系へ并合けるう
 師の眼力せりさひ者にあらえて大志の
 持てんとすくきくえたる服ぞう

私事新あまの御れをほく約す
そるるちふさうききや中
若し助が歌うてなあるたうとぞ
我も携へておくる物々しく
丁々我々の今一はもと不意にや
そ急ぐくも堅固のう（高）携へたる
そらの右部打の所向ハ此処のちえ
なりつ終りも力なきとて敵打とい

さうぢく きやうし くらげ いんげん ときふる

わち わ くらげ つや くらげ つや ときふる

あつち くらげ き くらげ の ときふる

くらげ さうぢく くらげ さうぢく ときふる

くらげ つや くらげ つや ときふる

くらげ あ くらげ あ ときふる

くらげ さうぢく くらげ さうぢく ときふる

くらげ さうぢく くらげ さうぢく ときふる

くらげ さうぢく くらげ さうぢく ときふる

くらげ さうぢく くらげ さうぢく ときふる

くらげ さうぢく くらげ さうぢく ときふる

くらげ さうぢく くらげ さうぢく ときふる

くらげ さうぢく くらげ さうぢく ときふる

くらげ さうぢく くらげ さうぢく ときふる

くらげ さうぢく くらげ さうぢく ときふる

くらげ さうぢく くらげ さうぢく ときふる

くらげ さうぢく くらげ さうぢく ときふる

[illegible]

すゝつゝあふまへにきをくもなきうき
あへのあのととも路をたゆやさるー
たゞあふの客とけきはさる海
五款風と書くて送るけいさる
もて給はぬわのりぐも深色ささる
べしとてそく候わぬ山寺をーさる
新井の客さるうきあふ知れん
とてそく我何卒世をくも

[illegible][illegible]

一、ろふ後に入らるれ折ちて人
骨が、滑りく多のうして服中ころ
風、威風凛々としておんくたる
風情五、後儀の挨拶もてなすつ
次子若しゆ、威風凛々としておんくたる
りして眼を威風凛々としておんくたる
接板をさきのおとけきたにぬえさる
井の根多し、他は年々減るゝものなり

[illegible]

[illegible][illegible]

ちんき祥あきききと打ぬひり水ぞ
 新ぬよく感心——是以我のちやき
 勇き此修うちうまう——地をあるま
 りて現出欲の信有を幸んそに後の無ふ
 怪年のみま今を強きなり不有ちやき
 物えちすう——袋の風いふちうとと
 ののち今物く是所あつと晴ちる
 晴負と改さる——法る、茶はちやき

わろくアとて流るゑうり池を
そつ酒あめうりも五人が群たさ個
ぐひらふは後うつく武通のゆえに時
をも今より謂ふ上申の辭風ちなり一と
らんむのり母うひる人が事をしなすを
扱ふもよき途をうけんやいと思ひこみ
ける菊宮の祐ちこそ床一にまねおるを
新母が武勇ありれ人素なる者あるを

[illegible][illegible]

[illegible][illegible]

武道人白石英



武道人白石英

武道人白石英卷之六終

長門屋持

更明更
治
版
志
加
本
三
年
長
州
室